

13. STA-MCA anastomosis 術前後の局所脳血流の変化 (^{133}Xe 吸入法による症状の変化と比較)

大場 洋 松田 博史 関 宏恭
隅屋 寿 辻 志郎 寺田 一志
秀毛 範至 久田 欣一 (金沢大・核)

STA-MCA anastomosis 術をうけた脳梗塞患者 8 人に対し、術前、術後に ^{133}Xe 吸入法により脳血流量を測定した。症状は片麻痺、言語障害、意識障害について術前後に評価した。

症状の明らかな改善をみたもの 4 例、このうち半球平均血流の有意な増加を認めたもの 3 例、症状の改善が明らかでないかまたは全くないもの 4 例、この内血流増加したもの 1 例、低下したもの 2 例、有意な変化のないもの 1 例、症例は少ないがおおむね脳血流変化と症状、特に片麻痺、言語障害とは関連があると考えられた。手術による侵襲およびリハビリによる改善などの影響があり脳血流測定、症状評価の時期の設定など、今後症例を重ね検討して行きたい。またリハビリとの関連も検討したい。

14. ^{67}Ga が腎集積した興味ある 1 例

木村 一秀 中津川重一 小島 輝男
前田 尚利 浜中大三郎 石井 靖
(福井医大・放)

Ga-67 シンチグラフィにて両腎にび慢性集積を認めた SLE の 1 症例を経験した。65 歳の女性で主訴は高血圧・発熱。多発関節痛が現われ、蛋白尿も認められ、胸部単純写真で心嚢水・左胸水が認められた。蝶形紅斑が現われ、精神障害・脱毛・前けい部浮腫も出現して抗核抗体が陽転した。Ga 静注 3 日後のシンチグラムで両腎に淡いび慢性集積を認めた。腹部超音波検査で両腎実質のび慢性病変と考えられた。同年 6 月の Tc-99m DTPA によるレノグラムで排せつ遅延は認められなかった。これらのことから血管炎か間質性腎炎が考えられ、病理所見では糸球体腎炎も認められた。両腎に Ga のび慢性集積を示した SLE の 1 例を報告した。

15. 反復投与法による ^{67}Ga scintigraphy の試み (第一報)

山本 恵祥 木戸長一郎 近藤 邦雄
(愛知県がんセンター・放診)

^{67}Ga は、その高い腫瘍親和性のため、腫瘍検索に供されているが、対象の如何を問わず、通常 48, 72 hr 後に撮影が行われている。

今回われわれは、総投与量 3.0 mCi を 0.2 対 0.8 の割合で反復投与する方法を用い、集積減衰の pattern を simulation し、測定部位と back ground との測定値の差 (contrast 値) が最大となる時間を予測、実測値との比較を行った。正常肝と大腿を back ground にとった試みでは、撮影可能な 30~48 hr 後にかけて、反復投与法の方が一回投与法より高い contrast 値を示した。また、contrast 値の peak の移動を目的に、投与後 30 hr を目標とし、肝細胞癌の腫瘍部と非腫瘍部を対象とした試みでは、予想どおり 30 hr 後に peak が見られ、contrast 値は反復投与法の方が僅かに高かった。

16. ^{67}Ga スキャンングにおいて縦隔、肺門部に異常集積がみられた例の CT との対比

外山 宏 竹内 昭 安野 泰史
斉藤 隆司 河村 敏紀 伊藤 毅
花井 直子 真下 伸一 片田 和広
古賀 佑彦 (藤田学園・医・放)

縦隔、肺門部についてガリウムシンチと CT を比較検討した。対象は昭和 60 年 1 月より 10 月までにガリウムと CT が前後 1 か月以内に行われた 107 例で、おのおの Grade 0~III に分類した。CT の異常の有無をもとにしてシンチを分析すると、CT で所見ありシンチで集積したものは肺門部で 73.3% と高く、縦隔部で 62.1% とやや低値で、逆に、CT で所見なくシンチで集積の見られないものは、肺門部で 61.0%、縦隔部で 94.9%。CT で所見ありシンチで集積の見られたものは、肺門部 40.7%、縦隔部 81.8% と、ともに縦隔部の方が高値でシンチで陽性となったものに関しては、縦隔部の方が診断的意義が高いと思われたが、肺門部で集積の強いものは診断的意義があると思われた。